水俣学通信

第 67 号
2022.2.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies

水俣今昔シリーズ17　中尾山のテレビ塔（水俣市長野）（1962年と2012年）

目　次

論説：
「犠牲区域・水俣の犠牲区域」 …… 2
田中雅一

報告：
「井上ゆかり著『生き続ける水俣病』、生協総研賞『研究賞』授賞式に参加して」 …… 3
山﨑優子

「福岡女子大学水俣実習『今、ここにある水俣病』」…… 4
鎌田菜那

「第18期公開講座『新型コロナウイルス感染症に翻弄される暮らしと社会：私たちはどのような未来を選択しようとしているのか？』を開催して」 …… 5
藤本延啓

「水俣学研究センターにおける水俣病関連資料の収集・公開状況」…… 6
花田昌宣

「水俣病資料からみえるもの：『三太郎タイムス』」…… 7
花田昌宣

水俣学研究センター日録 …… 8

熊本学園大学水俣学研究センター

《論 説》

犠牲区域・水俣の犠牲区域

国際ファッション専門職大学/京都大学名誉教授　田 中 雅 一

「犠牲区域」（Sacrifice Zone）とは、「社会発展」のために犠牲を強いられた地域のことで、石山徳子は原子力発電による安定的電源供与や国家安全保障という大義名分によって、環境や生活世界が破壊された地域を例に取りつつ、この概念を紹介している（『「犠牲区域」のアメリカ』岩波書店、2020年）。こうした地域は、人種主義や植民地主義など、既存の差別的イデオロギーによって選別され、その犠牲が正当化されてきた。アメリカ合衆国国内にあっては先住民保護区、国外にあっては核兵器の実験地となった南太平洋の島々や在外米軍基地がある地域などがその典型である。

こうした犠牲区域の内部においても外からの差別や排除の力が作用し、その結果犠牲の最下層に最弱者が追いやられることになる。内部に犠牲を次々と生み出す力は、しかしながら外部から押し付けられたものである。この短文では、水俣を重層的な差別構造が認められる犠牲区域と捉えたうえで、「内側」からの実践を考えてみたい。

＊　＊　＊

新型コロナウイルスの状況が少し好転し始めた2021年秋に思いきって水俣に行くことにした。10月には珍しくも30度を超えるような炎天下、私は水俣駅からチッソ（現、ＪＮＣ）の広大な敷地を右手に百間排水溝を通り、エコパーク水俣を横切る形で海岸までひたすら歩いた。エコパーク水俣とは、莫大な費用と年月をかけて、水俣湾を埋め立てて1990年に完成した竹林や競技施設などを指す。水俣湾には、水銀で汚染されているヘドロが数メートルの深さで堆積している。埋め立て工事はこのヘドロ対策のために実施された。その日は祝日だったこともあり、多くの人が埋立地でスポーツに興じていたが、彼らのうち何人が足下深くに封じ込められたヘドロの存在を知っているのだろうか。

埋め立てにあたって、水銀に汚染された魚たちが外海に移動しないように埋め立て予定地を囲んで網が敷かれた。その結果、魚を含む多くの生き物がこの網の中で息絶えた。つまり、埋立地とそれに隣接する海岸はまた、ヘドロとともに閉じ込められた生類たちの墓場でもある。犠牲区域が、他地域の繁栄や安寧のために、犠牲となり、その存在自体が隠蔽されるような地域を意味していたとするなら、埋立地はまさにエコパークという名前で隠蔽された「犠牲区域・水俣の犠牲区域」なのである。

かつて水俣病患者たちもまた、近親や隣人の者から差別され、排除され、隔離されてきた。汚染されて死に絶えた埋立地の魚たちもまた、同じように排除し忘却すべきではない。水俣病に苦悩し、死んでいった人びとを、さらには汚染された生類全てを受け入れるべきなのではないか。犠牲区域に新たな排除を生み出してはいけないのである。

こう考えると、埋立地は、忘却・排除と想起・連帯という二つのベクトルが交差する場所と言える。忘却・排除は美化によって自治体主導で実施された。では、想起・連帯にどのような実践が認められるのか。

埋立地の先端、恋路島がすぐ鼻の先に浮かぶ海岸縁に「本願の会」による野仏たちがひっそりと、しかし存在感を示して立っている。本願の会は、水俣病患者を主体とした会で、「裁判闘争」の後を想定し、より根源的な問題として水俣病を位置付けようとする目的で1995年に創設された。今回の訪問でもお会いできた緒方正人氏の提案で、会員一人ひとりが自然石に野仏を彫り、水際の公園に安置しようというのである（下田健太郎『水俣の記憶を紡ぐ』慶應義塾大学出版会、2017年）。

野仏たちは、水銀という毒が水俣にどのような悲劇をもたらしたのかを静かに、しかし雄弁に語っている。それらは、美化された埋立地にゆっくりと深く亀裂を入れる杭である。

一方で、隔離され、放置され、殺された生類たちに繋がろうとし、深く地中へと伸びる根茎でもある。私たちは、埋立地の先端で、野仏にふれ、多くの犠牲者を出した水銀と、これによって死に絶えた生類たちを想起するのである。そして、差別にさらされ人生半ばにして無念にも死を迎えた多くの水俣病患者へと思いを馳せる。野仏たちは、犠牲区域・水俣をなかったことにしようとする自治体の企てに加担することに警鐘を鳴らす。それらは私たちに「ここ」に何があるのか、何が起こったのか、起こっているのかを、鋭く、しかし限りなく優しく教えている。本願の会による野仏に関わる活動は、「犠牲区域」内に生じる差別や排除の構造を断ち切る内側からの実践なのである。

追記　緒方正人氏訪問にあたっては、宮北隆志、山下善寛両氏にお世話になりました。ありがとうございます。

《報 告》

井上ゆかり著『生き続ける水俣病』、生協総研賞「研究賞」授賞式に参加して

藤原書店　山 﨑 優 子

井上ゆかりさんの著書『生き続ける水俣病 ── 漁村の社会学・医学的実証研究』が、2021年の第13回「生協総研賞 研究賞」を受賞したという知らせを受けて、社長・編集長の藤原良雄とともに、12月３日（金）、東京四谷のプラザエフで開かれた授賞式に版元として出席した。井上さんとは、本が出版された2020年３月にお会いして以来、ご無沙汰していた。20年３月といえば、新型コロナウイルス感染症で安倍元首相がいきなり小中学校を休校にしたタイミングである。元看護師であった井上さんからお話を聞きながら、その時は、21年夏の医療崩壊と言われるほどの状況を、まだ想像もしていなかった。

授賞式は、特別賞が１人、研究賞が井上さんを含む２人。オンラインということで、出席者の数はそれほど多く見えない。それぞれの編集者も含め、人前で話し慣れた様子でお話しされるのを聞きながら、私自身はスピーチの予定はなかったにもかかわらず緊張していたが、井上さんの順番になると、突然、映像が流されるという。それは、原田正純先生が、水俣の、水俣病のかたがたと、車座で語りあう姿だった。私はひきこまれるように映像を見た。画面が小さくて聞き取りにくかったが、私は活字でしか知らない原田先生の、熊本の言葉の語りを聞いた。患者さんから話を聞くこと、話していただくこと、それよりもまず家に入れていただくこと、話をするという状況に身をおくことは、もちろん簡単なことではないと頭ではわかる。しかし東京にいて、メールで原稿をもらって、パソコンでやりとりして……そんな中で、その“人と人が話し合うこと”の大変さ（と書くのは簡単だが）のほんの片鱗でも、感じた思いだった。井上さんは、私が頭でわかったつもりになっていることを、全部いったんどこかにしまっておいて、そこにぶつかっていかれた。それがわかった、とはとても言えないけれど、どういうことを経た中で、この『生き続ける水俣病』が出来たのか、少しは見えたような気がした。

井上さんのスピーチでは、患者さんと国の関係、賠償の構造に関係して、水俣病と、今問題になっている新型コロナウイルス感染症のワクチン問題とをつなげて語られた。感染症におけるワクチンには、有効性とは別に、それで亡くなる人がいることは避けられない、その時の因果関係は必ず「明らかではない」という論理にされてしまう。水俣病そのものは現在も生き続けているのはもちろんであるが、これから起こる新しい問題にも、つなげて考えるべきだ、と語られた。

受賞者スピーチと、担当編集スピーチ、という段取りで授賞式は進んでいった。井上さんの後は、編集長として小社の藤原良雄が話した。同席されていた花田昌宣先生をいきなりお呼びして、一言を、とお願いしたので仰天したが、遠方からわざわざ授賞式に来られた先生の言葉で、水俣学研究センターを紹介し、その意味を語ってもらいたいと思ったのだと思う。藤原は、世間でよく見られるような慣れたしゃべりではない分、妙な迫力があるのである。

『生き続ける水俣病』の製作編集に関わり始めたのは、20年３月の出版の前年、19年の12月に入ってからだった。かなり短時日での編集作業で、藤原が予定をがちっと組み、それにあわせるように突っ走った。博士論文の書籍化と聞き、がっちりした固い論文と思って構えていたら、「まえがき」を読んで驚いた。なぜ、この本を書いたのか、これほど腑に落ちる、納得できる「まえがき」を読んだのは、初めてといってもよかったからだ。本書が多くの図表を盛り込み、きちんと記述された論文であることはもちろんだが、私が読書をするとき、それが研究書であっても何であっても、いちばん注目するのは“動機”である。それが薄弱な本は、うまく書けていても、なにかどうも通りぬけてしまう。この「まえがき」には、生まれた土地のこと、どのように水俣病と出会ってきたのか、調査での体験のこと、原田正純先生のことが、しみいるように書かれていた。その印象的なまえがきに引かれて、刊行まで何とか過酷な予定を乗り切れたと思う。

写真：(公財)生協総合研究所撮影・提供

藤原書店では、石牟礼道子の全集や、桑原史成の写真集、原田正純・花田昌宣編『水俣学研究序説』など、水俣病に関する書籍を出版している。授賞式の後の「打ち上げ」では、花田先生、井上さんと、今後の出版計画についても話し合った。考えてみれば、井上さんとお酒を飲むのは初めてなのだった。あまりに愉快な人だったので、嬉しい驚きだった。

《報 告》

福岡女子大学水俣実習「今、ここにある水俣病」

福岡女子大学国際文理学部環境科学科３年　鎌 田 菜 那

2021年11月30日～12月１日、私たち福岡女子大学国際文理学部環境科学科３年生は、授業の一環として、水俣での学外実習に参加させていただきました。学校の授業で聞いたり書物で読んだりしたことでしか水俣病を知らなかった私にとって、現地を訪れることは大変貴重な体験でした。

水俣での実習の参加前に、事前学習として、深井純一先生の『水俣病問題の行政責任』と『水俣病の政治経済学』、色川大吉先生の『水俣の啓示』の輪読をしました。水俣病の発生について、今までは排水を垂れ流したチッソのみが悪いと決めつけていました。輪読を通して水俣病の原因は単に工場排水だけではなく、国の経済の政策方針や水俣市のチッソへの依存などさまざまな要因が複雑に絡み合って水俣病問題が起こったのだとわかりました。そこで今回の実習には、主に現地の方の目線で水俣病発生の問題点を探りたいという思いで臨みました。

水俣病の発生について、今までは歴史の授業で出てくる多くの出来事の一つとしてしかとらえることができていませんでした。しかし、現地での実習を通して、水俣病の発生とその被害は現実に起きたことであるのを肌で感じ、「単なる出来事」ではなく、同じようなことを繰り返さないために「伝え続けていかなければならない出来事」であるというように認識が変わりました。なぜ歴史の授業で習ったのか、それは、同じことを繰り返してはいけないからだとようやくわかりました。以下、現地実習の内容と感じたことを述べます。

水俣到着後、まず、百間排水口を見学しました。水銀を含んだ排水が垂れ流されていた場所で、ここから被害がどんどん拡大していったのかと思いました。

次に水俣市立水俣病資料館・国立水俣病情報センターを訪れました。水俣病に関する貴重な資料が数多く展示されており充実していると感じました。それらの資料ひとつひとつから、水俣病の悲惨さや被害者の方々の苦しみがひしひしと伝わってきました。未だに解決していない水俣病問題について、この惨状を知った自分たちが水俣病問題を終わったことにしてはいけない、ここで感じたことを伝え広めていかなければならないと強く思いました。

また、水俣湾埋立地も見学しました。自分が今立っている場所の真下には汚染魚やヘドロが埋まっていると思うと、驚きと悲しみが入り混じった何とも言えない気持ちになりました。それがさらにエコパーク水俣全体に広がっていることを考えて再度見渡すと、水俣病被害の大きさ・広さを改めて感じました。

その後、坪谷を訪ねました。ここが水俣病公式確認のきっかけとなった地なのかと思って見ていると、田中家の姉妹が遊んでいる情景がぼんやりと頭に浮かびました。そんな幸せな日々から被害に苦しむまでの過程を想像するだけで心が痛みました。

ほっとはうすにて永本さんと（2021年11月30日）

午後は、胎児性患者や障害者を受け入れ就労継続支援などのサービスを提供している「ほっとはうす」を訪ね、施設の見学などをさせていただきました。そこで、語り部として活動されている方のお話を伺う機会があり、実際の患者の方にしかわからない葛藤や複雑なお気持ちをお聞きしました。患者としての立場と患者家族への周囲の言動について、ご自身の言葉で語られていて、言葉ひとつひとつに現実味や重さを感じ、その苦しみは自分がもし患者だったらと少し考えるだけで涙が出てきそうなほど伝わってきました。

１日目の最後には水俣学現地研究センターを訪れました。資料を自由に見させていただき、健康・医療・福祉相談で実際に使われている道具も体験させていただきました。

２日目には、熊本学園大学の中地教授の水俣学に関する講義を拝聴しました。講義の中で強く感じたことは、補償金をめぐっての問題や水俣市には水銀による汚染が残っていることなどから、水俣病はまだ終わっていないということです。そして同時に、途上国では水銀の使用が継続されている中で、水俣のような悲惨な公害を繰り返さないように対策していくべきだと強く感じました。

最後に、研修全体を通して、水俣での水銀による被害は現実に起こったことであるということを実感し、このような悲惨な出来事は絶対に繰り返されてはならないと思いました。そして、水俣病問題をこのまま終わらせないようにするためにも、自分たちが学んだことをどのようにして活かしていくかが課題であると考えました。その課題を考える一歩として、今回の実習では現地の方の目線で水俣病問題を捉える視野を得られたのではないかと思っています。

《報 告》

第18期公開講座「新型コロナウイルス感染症に翻弄される暮らしと社会：私たちはどのような未来を選択しようとしているのか?」を開催して

熊本学園大学社会福祉学部
（水俣学研究センター研究員）　藤 本 延 啓

コロナ禍が続いている。今年度の水俣学研究センター第18期公開講座では、昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの蔓延をテーマとした。今回の趣旨について、企画を担当した宮北（水俣学研究センター）による文章を引用しておこう。

2020年３月のパンデミック宣言（WHO）から１年半、新型コロナウイルス（SARS-Cov-2）による未知の感染症（COVID-19）は、世界中に蔓延し（確認された感染者は１億9,000万人を超え、死者は400万人を上回る：2021年７月19日現在）、未だに終息への道筋は見えてこない。未知のウイルスは、変異を繰り返す中で感染力を高めつつあり、その起源、人への感染ルートの解明もなされない中で、社会的格差が拡大し、「貧困」の固定化が進行している。

昨秋に続く今年度の公開講座では、この１年あまりの間にあぶり出されてきた諸課題をみんなで確認・共有し、「今を生きる私たちに、また社会に求められているものは何か」についての議論を深め、人と人・生き物、そして健全な生態系全体とのつながりをより豊かにしていくための方策について、水俣・芦北地域から発信していきたい。（第18期公開講座ちらしより引用）

全５回とした第18期公開講座の初回は、国際医療福祉大学医学部公衆衛生学教授の和田耕治氏からの「新型コロナウイルス対策～これまでとこれから～」と題した講演である。全国的な状況や国策に通じた氏の知見・経験を背景に、新型コロナ蔓延にかかわる状況と対策について、これまでの全国的なデータに基づきながら整理してしていただき、また今後の展望についても具体的な方策を含めた解説をいただいた。

２回目は、茨城県潮来保健所長・日本公衆衛生学会感染症対策委員の緒方剛氏からの「新型コロナ対策の疫学的検討」と題した講演である。「医学」と「公衆衛生」の相違から説き起こし、公衆衛生の観点から個人的・社会的な新型コロナ対策、疫学的見地からの現状等について、また日本の社会や政策における課題の指摘も含めて、具体的に分かりやすくお話をいただいた。

３回目は、宮崎県立看護大学講師・元熊本市保健衛生部長統括保健師の髙本佳代子氏からの「政令指定都市の保健所での取組を振り返って」と題した講演、あわせて水俣学研究センターの宮北からの「今だからこそ考えよう、持続可能でレジリエントな暮らしと社会」と題した講演である。まず髙本氏からは、地域保健活動における新型コロナへの対応体制・手法といった具体面から、「健康」「ヘルスプロモーション」「まちづくり」といった理念面まで、幅広いお話をいただいた。また宮北からは、新型コロナが蔓延する社会状況を「未来選択の契機」として位置づけ、「『３つの密』から『３つの生』へ」「自分たちの手（地域）に人と人との『つながり』を取り戻す」とする提案があった。

４回目は、菊池保健所長・県北広域本部保健環境福祉部長・菊池福祉事務所長の劔陽子氏からの、「熊本県の県型保健所におけるコロナ対応」と題した講演である。現役の保健所長である氏の現場経験を踏まえて、保健所の体制と通常業務から、新型コロナ対応における保健所の役割・活動について、「病院で発生したら」「学校で発生したら」「妊婦さんが感染したら」といった具体的な事例を含めながら解説をいただいた。

そして最終回となる５回目は、熊本学園大学社会福祉学部准教授の矢野治世美氏からの、「感染症と人権―新型コロナウイルス感染症をめぐる差別―」と題した講演である。氏の研究テーマである「差別」「人権」を切り口に、社会の現状をハンセン病患者・水俣病患者・HIV感染者といった当事者に対する差別、あるいは過去の感染症流行時に発生した差別事件等と比較し、さらにはワクチン接種をめぐる差別にも言及しながら、（コロナ禍の現状のみならず“コロナ後”も含め）現代社会の課題を指摘いただいた。

なお、今回の公開講座は、遠隔参加と会場での参加が混在する「ハイブリッド形式」で実施した。水俣学研究センター公開講座においては初の試みである。

「遠隔（ZOOM）参加」「会場（水俣市のエコネットみなまた）参加」のいずれも選択できるものとして、また、どちらの参加形態を選択しても、十分な受講効果が得られるように配慮をした実施に心がけたつもりである。

今回の開催においては、「ハイブリッド形式」だからこそ得られたメリットも大きかったように思う。今回の経験について、“コロナ禍における緊急対応”の域にとどめず、不具合の改善を図りながら、水俣学研究センターにおける活動方法の拡張へと役立てていきたい。

《報 告》

水俣学研究センターにおける水俣病関連資料の収集・公開状況

水俣学研究センター長
（熊本学園大学社会福祉学部） 花 田 昌 宣

ユージン・スミスの活動を描いたジョニー・デップ主演の映画「MINAMATA」が公開され、水俣病に関する新刊書籍も相次いでいる。この公害事件の発生が確認されて66年経過してなお新たな事実も発見される。

熊本学園大学では、水俣病事件の全体像解明を基礎に新たな学術分野と方法論を開拓し水俣学の研究と教育さらに社会貢献を目的として、2005年に水俣学研究センターを設置した。この研究センターでは体系的に資料を収集し、水俣市内に設置された水俣学現地研究センター（熊本県水俣市浜町２丁目7-13）ならびに本学キャンパス内（熊本市中央区大江２丁目5-1）の書庫に収蔵するとともに積極的に公開している。水俣学研究文献データベース作成事業はその一環として位置付いている。

水俣病事件に関わる資料の収集・整理、公開と発信は国際的にも求められている。我々は広範な学問領域にわたる水俣病関係文献の網羅的なデータベース化を行い、公害史・水俣病事件史の研究のみならず、水俣病の現在の課題や将来の構想にかかる国内外の研究に寄与しようとするものである。なお、水俣病事件にかかる資料に関する公開データベースは本研究センター以外には見られない。水俣病事件にかかる文献や資料については熊本大学文書館をはじめ国立水俣病総合研究センター、水俣市立水俣病資料館、水俣病センター相思社、矢作正氏の運営する「技術と社会」資料館などに収蔵され、目録も一定程度公開されている。我々としては、単に資料を収蔵するだけではなく、資料が積極的に活用されて調査研究の活性化に繋げて行きたいと考えている。そのためにはこれらの資料を活用して我々自身が研究成果を上げていくことも必要だ。いっぽう、そうした状況の中で、かつて水俣病に関わっていた方々や水俣地域の方々からの資料寄贈の申し出も続いている。我々は基本的に断ることなく受け入れ、順次公開している。

目録・データベースの公開状況について

水俣学研究センターが所蔵しデータベース化を図った資料・情報などの状況は次段のとおりである。これらは当センターホームページで目録を公開しており、一部ではあるが資料画像や写真画像を閲覧でき、また音声データを目録上で視聴できるシステムを構築している。なお下記以外にも寄贈を受けた資料類で、受贈の受付はしたものの予算や作業人員の制約もあり、登録作業が進んでいない資料も少なからずある。

① 新日本窒素労働組合旧蔵資料

② 水俣病研究会蒐集資料（患者支援を行った研究会の資料）

③ 宮澤信雄旧蔵資料（患者支援と事件史研究を続けたジャーナリストの資料）

④ 最首悟旧蔵資料（不知火海総合学術調査団に参加した研究者の漁業資料）

⑤ 浜元二徳旧蔵資料（水俣病一次訴訟原告の資料）

⑥ 松本勉旧蔵資料（元水俣市市役所職員で水俣病市民会議の事務局長の資料）

⑦ 鰐淵健之旧蔵資料（1959年厚生省水俣食中毒特別部会の委員代表の資料）

⑧ 馬場昇旧蔵資料（元衆議院議員で水俣病に取り組んだ政治家の資料）

⑨ 堀田宣之旧蔵資料（宮崎県土呂久で砒素中毒調査を行った医師の資料）

⑩ 熊本県教組水俣芦北支部旧蔵資料（患者を支援し公害教育の実践に取り組んだ教職員組合の資料）

⑪ 名古屋水俣病を告発する会資料（患者支援に取組んだ名古屋市民グループの資料）

新たな取り組み

新たな挑戦としては、原田正純先生をはじめ個人情報の多い調査資料やカルテなどを含む医学調査の資料のデータベース化を予定している。これらの資料には水俣病研究のほか、ヒ素中毒調査、一酸化炭素中毒患者調査資料、精神科患者の脳波や映像などが含まれており、水俣病事件史研究のみならず他分野の研究者に公開が待たれている一級資料である。紙資料のみならず、カセットテープや映像フィルムに関してはデジタル変換し公開する。これまで松本勉旧蔵資料で音声を目録上で公開してきた経験があり技術的には十分可能である。なお、資料に含まれる個人情報については、研究会を開き、マスキング基準・公開基準など検討を重ねたうえで準備にあたる。託された資料を公開することは、後世に水俣病事件を負の遺産として引き継ぐものであり、又聞きなどではなく、一次資料に基づく研究を可能にしたい。

《報 告》

水俣病資料からみえるもの：「三太郎タイムス」

水俣学研究センター長
（熊本学園大学社会福祉学部）　花 田 昌 宣

水俣・芦北地域の新聞としては、戦前には「葦北実業新聞」および「三太郎タイムス」が知られている。いずれも大正末期から昭和初めの政友会系の新聞とされている。同時期、水俣の隣町の鹿児島県の出水では４紙の新聞が発行されているが、水俣・芦北では１紙。この「三太郎タイムス」は大正14（1925）年春に月１回のペースで刊行が始まり、10月には月２回刊になり、発行所は葦北郡佐敷、編集人は肱黒尚志とある。

大正15（1926）年１月１日号を見ると、三太郎タイムス社顧問として徳富猪一郎（蘇峰）と記載されている。そのころ蘇峰は東京にいて、関東大震災（1923年９月）で事務所が全壊の被害にあった國民新聞の再建のために奔走しており、この新聞「三太郎タイムス」の編集や運営には直接はタッチしていないものと思われる。なお、同時期、水俣を拠点とする新聞には大正14年10月発刊の「城南新報」（政友本党機関紙、未見）がある。

謹賀新年
大正十五年一月一日
顧問　徳富猪一郎
社友　淺谷了容
元山磯男
林正遠
三太郎タイムス社

THE SANTARO TIMES 大正15年１月１日
（水俣学研究センター所蔵）

「三太郎タイムス」によれば、大正14年８月には熊本県議会議員の補欠選挙があり、政友本党の深水達美氏と憲政会の前田隆氏の一騎打ちとなった。当初、日本窒素肥料水俣工場長の岩崎勇氏が出馬予定であった。同社には有権者200名余がおり、町議会に７名の議席を有していた。しかし両政党の対決構図の中で工場長の岩崎氏は立候補を断念、日本窒素肥料会社としては中立を標榜しつつ、実のところ、水俣工場の係長らが憲政会を支援していたようである。結果は政友本党の深水達美氏が議席を得た。

さて、「三太郎タイムス」の大正14年10月24日号には「水俣のチフス猖獗 すでに患者38名」との記事が掲載されており、明治10年のコレラ大流行の折に建設された伝染病院と思われる「避病舎も増築して増加するチフス患者を収容」していると伝えている。この感染症は、水俣町（現水俣市）の旭町からはじまり、江添、陳内、古賀に広がっていったとされており、当時の街の中心部がチフス感染拡大の影響を受け、商況に大きな影響が出ていると報じている。

大正15年３月24日号には、県立芦北農林学校の卒業生の進路が掲載されている。39名中、ブラジル移民が５名、ボルネオおよび南洋移民が２名いる。熊本はもともと移民送り出しの地域であり、葦北の卒業生が海外移民を希望するのは珍しくはない。大正13年から政府による南米移民渡航費補助が始まっており、大正15年からは政府の補助も拡大している。なお、これらの移民は自ら渡航費や生活費を工面できる人たちに限られていて、いわゆる貧農階層ではなかった。農林学校の卒業後の進路がブラジル移民と記されている件についてはもう少し調べないといけない。

日本窒素が水銀を流すアセトアルデヒド工程の始まりが1932（昭和７）年と言われており、以上がその少し前の水俣・芦北地域の様子である。

コラム 水俣の夕暮れ

水俣には新幹線で行くことが多い。日頃は新水俣駅からタクシーで市街に向かうのだが、この日は歩いた。冬の薄暮の時間帯に新水俣駅から水俣市街の方、つまり西の方を見ると夕暮れがとてもきれいだ。

むかし、津奈木から峠を越えて、やがて水俣の街中に入ろうとした旅人たちはこの夕陽を見たのであろう。新水俣駅（地元では新駅という）から少しなだらかな坂を上りやがて下り坂。そしてその向こうには不知火の海が広がっている。国道３号線をとおって水俣市街に向かう。20分あまり歩けば水俣川にかかる橋を渡り市街地に入って行くことになる。橋を渡らず左に行けば旧お屋敷町の陣内方面、逆に右にとって水俣川河口に向かえば、石牟礼道子さんの作品に出てくるさるごう（猿郷）で、かつての避病院のあった方だ。時には歩いてみるのもいい。

新水俣駅前、国道３号線から水俣方面をのぞむ
（2022年１月 筆者撮影）

水俣学研究センター日録

10月

1日　全国労働安全衛生センター運営委員会：中地（オンライン）
2日　豊島弁護団会議：中地（オンライン）
3日　SRIREP（総合地球環境学研究所）セミナー：宮北（オンライン）
5日　公開講座２回目・緒方剛先生：宮北・中地・高峰・藤本・田尻・井上・福田（水俣）
6、7、8、12、13、14日　最低賃金産業別審議会：高峰（熊本）
7日　水俣学講義２回目・田尻（大学）
8日　若かった患者の会：田尻（水俣）
9日　熊本未来基金配分委員会：高峰（熊本）
9－10日　震災アスベスト調査：中地（石巻）（南相馬）
11日　JESCO大阪PCB処理事業監視部会：中地（オンライン）
水俣学研究センター第36回定例研究会：花田・宮北・中地・高峰・藤本・井上・田尻・矢野・萩原・東（大学）
デジタルアーカイブ学会：井上（オンライン）
12日　公開講座３回目・高本佳代子氏・宮北隆志：花田・高峰・藤本・田尻・井上・福田（水俣）
水俣病被害市民の会：山下・伊東（水俣）
14日　水俣学講義３回目・柳田耕一氏（大学）
16日　経済理論学会「公害発生企業チッソの企業体質とその特異性」：花田・磯谷（札幌）
17日　大関山の巨大風力発電勉強会：宮北（芦北）
18－19日　京都大学名誉教授田中氏来訪：宮北（水俣）
19日　公開講座４回目・劔陽子氏：花田・宮北・中地・高峰・藤本・田尻・井上・福田（水俣）
21日　水俣学講義４回目・永本賢二氏（大学）
22日　「熊本学園大学公的研究費の取扱い要領」変更についての説明会：花田・井上・田尻（大学）
23日　全国労働安全衛生センター総会：中地（オンライン）
公害資料館ネットワークセミナー：中地（オンライン）
25－27日　廃棄物資源循環学会：藤本（オンライン）
26日　公開講座５回目・矢野治世美先生：花田・宮北・中地・高峰・藤本・田尻・井上・福田（水俣）

11月

2日　地球・人間環境フォーラムグローバルネット編集部鈴嶋氏取材：田尻（水俣）
4日　水俣学講義５回目・井上（大学）
『水俣学研究』編集委員会：花田・萩原・矢野・田尻・井上（大学）
5日　ダイオキシン国民会議国際セミナー：中地（オンライン）
6日　国水研NIMDフォーラム：花田・田尻・井上（オンライン）
8日　水俣病事件資料集編纂委員会：花田・高峰・矢野・井上・東島・隅川（大学）
9日　労働資料協総会：花田・井上（オンライン）
11日　水俣学講義６回目・藤井絢子氏（大学）
12日　共同利用・共同研究拠点申請文科省事前相談：花田・中地・井上・中山（オンライン）
13日　福祉環境学特講：花田・中地・矢野（水俣）
13－14日　日本社会学会：藤本（オンライン）
16日　差別禁止法研究会当事者の会研究会「水俣病をめぐる差別実態」田尻：花田・山下（オンライン）
17日　カナダLauri-Ann Marshal（Mercury Care Home エグゼクティブディレクター）とクリニックの組織方法に関する意見交換：田尻・中地（オンライン）
18日　水俣学講義７回目・阿部美紀子氏（大学）
19日　東京大学大学院生資料閲覧と調査：（大学）
20日　リスク学会シンポジウム：中地（オンライン）
22日　共同利用・共同研究拠点申請
25日　水俣病関連写真整理に関する打合せ：芥川・塩田・吉永・花田・井上（大学）
水俣学講義８回目・石貫謹也氏（大学）
27日　エコネットみなまた総会：花田・田尻・松永・永野・山下（水俣）
30日－12月１日　福岡女子大学研修受入：田尻（水俣）中地（熊本）

12月

2日　水俣学講義９回目・中地（大学）
3－4日　生協総研賞第13回表彰事業受賞式：井上・花田（東京）
4日　福祉環境論特講水俣研修：中地・矢野（水俣）
環境社会学会：藤本（オンライン）
8日　差別禁止法研究会：田尻（オンライン）
9日　水俣学講義10回目・斎藤恒先生（オンライン）
11日　若かった患者の会：田尻・（水俣）
12日　国水研写真家の眼プロジェクト：花田（オンライン）
14日　風力発電講演会実行委員会：中地（水俣）
15日　化学物質リスクセミナー：中地（オンライン）
水俣学講義11回目・磯谷明徳先生（大学）
18日　「環境と公害」編集委員会：中地（オンライン）
20日　水俣学研究センター2021年度臨時総会（大学）
21日　科研間接経費購入什器納品（大学）
22日　関西労働者安全センター運営協議会：中地（オンライン）
21－23日　日本公衆衛生学会「健康・医療・福祉相談から見える水俣病被害の実態と施策の課題―被害者が求めるもの」田尻・井上（オンライン）
23日　水俣学講義12回目・小野田學先生（大学）
隔週火曜：健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
そ の 他：胎児性水俣病世代の被害に関するWGは10回開催。
部落問題、豊島関連、香害、Tウォッチ、差別と人権、震災アスベスト関連、オリーブ基金など環境問題に関する研究会などへの協力も行いました。

編集後記

2022年を迎えた。水俣病公式確認から66年を迎えるが、問題解決へは程遠い。日本は三権分立の国と義務教育で教わったが、疑問である。（M・T）

水俣学通信
第67号 2022.2.1

編　集／熊本学園大学水俣学研究センター　　発行人／花田　昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1　熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913(ダイヤルイン)　Fax：096-364-5320
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/　E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印　刷／ホープ印刷株式会社